

## 現地召集 ミンダナオ砲兵川添部隊

鳥取県 香川 亘

―香川さんは倉吉市生れですが、勤務地は何処だったのですか。

私は、今は倉吉市になっているが、生れた時は東伯郡上小鴨村というところで、大正十年十月二十三日に生れました。しかし、私は他の人と違って、昭和十二年八月に、フィリピンのミンダナオ島ダバオ市へ行ったのです。

永田高慶さんという方から、「二十八年間、現地でマニラ麻の栽培などし、百貨店や自動車会社など、手広くやっている滋賀県出身の、古川義三という人の会社で働かないか」と呼び寄せられたのです。そこで戦争が始まるまで四年余り勤務していました。

昭和十六年十二月二十六日、日本軍が上陸占領し、

海軍管轄で敵産管理部へ入ったわけです。軍属として、スペイン語の通訳や道案内などしていたが、絶えず敵の敗残兵が出没、毎晩のように夜襲があり、一度に七人も戦死したことがあって、当初の治安は悪かった。渡河は橋でなく渡し船だが、警備をしていないと、ゲリラに襲われたり妨害されたりで河が渡れない。

昼は部落の討伐をするのだが、ある時、三〇名でマバンタオの敵兵舎を占領し焼き払ったことがある。マバンタオ兵舎へは道が無く舟で行ったが、岸から相当射たれた。河のカーブの所は渦巻いて、河底まで棹が届かぬので、そこを狙い射ちされ、犠牲者を出したこともある。

私は前にも申したとおり、海軍管轄下だったが、飛行場が爆撃で穴をあけられると、飛行機の発着が出来ない。そこで、会社の現地人従業員を五〇人くらい連れて行って整備もしていた。ゲリラとの戦闘など、毎日だったので、軍属というより軍人と同じ勤務というわけです。

―大正十年生れというと、昭和十七年徴集ですが、

敵兵検査はどこで受けたのですか。

昭和十八年ダバオ市で受けました。軍属で遅れたわけです。会社の際は海軍だったが、入営は陸軍で、現地召集兵ということです。ダバオ市内のカリナン地区の川添（砲兵）部隊、大隊本部、第二中隊に配属されました。陸軍では野砲兵になったのです。

当時、陸軍は山の頂上に陣地を持っていた。米軍がいよいよ上陸したので、日本軍は斬込隊で攻撃する前に、野砲の砲撃命令が出た。川添部隊は砲撃するのが任務だから、日本歩兵の進路を砲撃した。「攻撃止め」で歩兵が突っ込んでいく。いわゆる歩砲連合の攻撃です。

ミンダナオの陣地の辺りはジャングルばかり、アメリカ軍が上陸したのは、海岸の私たちの本社「古川拓殖」の近くだった。米軍は相当多い兵力だった。その時には、日本軍の飛行場は爆撃され、飛行機は無くなり、飛行兵は飛ぶ飛行機が無く、地上軍となってしまうた。

川添部隊の野砲は、山頂から米軍通路を砲撃した。

川添部隊へは、私は途中から入隊したので兵力は良く判らないが、入隊前に戦死した者もあったという。それでも当時、一〇〇名や一五〇名ではなく、もっといたように思う。砲は一個中隊に三門ぐらいだったか、陣地は点々としており、私は他の隊がどのくらいだったかを見ていない。

我々の砲隊は壕を掘って、砲の体が隠れるようにしてあり、弾薬などの壕もあった。砲を射った時はほとんど夜だった。昼間射って位置が判ってしまう。射つと爆煙は直ぐには消えないからだ。砲と米軍陣地の中間にはジャングルや森林があつて、夜だと発射の光は良く見えない。

毎日、川添部隊の砲撃があるので、敵も兵舎に寝ることが出来ず、夜は壕の中にいたと、歩兵の人が言っていた。また、自動車のスプリングで軍刀を作り、それを斬込隊で使ったとも聞いた。

米軍上陸から戦闘を続けていたのですが、終戦は何時頃知ったのですか、またその後はどんな生活をしましたか。

昭和十九年八月以来一カ年以上戦っていたのですが、昭和二十年九月十五日俘虜になったのです。その時、昼間歩哨に立っていたら、一人の日本人が先頭に立って、米軍が三名程山の下から登って来た。

大きな声で「自分達は戦鬪に来たのではない、宣撫に来たもので、皆を下山させようと思って来たのだ」という。そこで、直ぐ後方へ連絡したら、皆が来て、日本人から詳しく聴いたら「沢山の日本軍が来ている」と言うので、下山することになった。

敵から取った拳銃などは穴を掘って埋め、また我軍の兵器も全部埋め、着のみのまま、無腰で山を降りていった。

九月十五日から十月初めまで収容所において、出港は十月頃だったが、一週間ぐらいで帰国し、十二月三日宇品に上陸した。

フィリピン方面で、良く無事に、また早く帰れませんでしたね。ミンダナオでの想い出や、帰国後のことを話して下さい。

川添部隊の砲陣地はよく奪われなかった。米軍は海

岸に陣地を占領しただけだった。ミンダナオ島の我々のいた所は山奥で人は住んでいない。日本人は勿論、現地人もほとんど海岸付近だけに住んでいた。

ルソン島と違い、ミンダナオ島は未開だった。私も古川拓植経営のマダウムの二、〇〇〇町歩の農場にいたが、これも海岸である。その他の農場も方々に点々とあったが、山奥にはなく海岸付近だった。

戦争中の食糧は野生植物、木の実、バナナ等だった。夜、木の実を取りに行ったり、現地人が逃げた跡の物を徴発にいった。ミンダナオは、他の地域と違い幸せだったが、夜出動すると、衣服も靴の中も夜露で、雨降りの時と同様に濡れる。

川添部隊は歩兵でないので、敵と直接攻め合わなかったし、空襲も直接受けなかった。砲兵陣地が空から見えなかったからでしょう。また、海岸からも相当離れていて、前にも言ったように、途中というか中間に深い森林があり、道路もほとんど無かった。

私は海軍軍属の時、日本軍の陣地間の直線道路を方々、あちこち測量した。三、〇〇〇メートルもあるア

ボ山の頂上まで測量した。そこは現地人も知らぬ所だ  
と思う。苔が腰の辺まで深く生えていて、苔の所へ行  
くと埋まってしまうので、尾根にある鹿の道を歩いた  
のです。頂上には鹿以外には鳥も蟻も蛇もいなかった。  
帰国して直ぐに大阪へ働きに出て鉄道産業株式会社  
に叔父のツテで勤務、その後、中山製鋼関係の会社で  
働いたが、肺浸潤に患り退職しました。私は無理な勞  
働も出来ない、病氣も南方での勤務が影響していたら  
しいが、思案の末、大阪と和歌山の理容師の免許を取  
り、現在も理髪業を続けています。

私の兵籍は現地召集のため県に無い。川添部隊の  
ことも戦友のことも良く判らない。戦中のことをメモ  
した帳面を山を降りる時埋めて来たので、何とか戦友  
を捜したい。川添部隊長の階級は砲兵大佐だったと記  
憶している。とにかく、復員の時は米軍の船だったが、  
同じ部隊の人が一〇〇名ぐらい一緒だった。

### 【追記】

#### 一、戦前の現地勤務

#### 勤務地と企業

昭和十二年八月十五日、比島ミンダナオ島ダバオ市  
古川殖産(株)(本社IIダリアオン地区)所有農場の  
ラサン地区農場(マニラ麻栽培)に勤務。  
昭和十七年三月頃、マダウム農場(麻栽培)勤務。

マダウム農場は麻栽培の農場で、現地労働者の食  
糧のため、野菜、サツマ芋、トウモロコシ、米(陸  
稻)、砂糖キビの栽培及び椰子園の管理、養豚等  
を行い、また、海に三〇〇メートルの漁獲用ヤナ  
を設置し、毎日沢山の魚を採った。

ヤナには、時には鯨が入り、捕獲してマサカリで  
処理したり、ジュバン鮫は皮が硬く槍でも銃でも  
びくともせず、満潮時に逃げられる、等のことが  
あった。戦争の初期には海軍にマニラ麻を沢山出  
荷し、サツマ芋は一年中できるため海軍の船舶で  
他の島にも送られた。

働いている人は日本人の社員は二〇名、現地の勞  
働者は六〇〇名、その家族を含めて約二、五〇〇  
名がいた。

#### 二、開戦時

昭和十六年十二月九日、比島の現地兵隊によりミンダオ島の日本人全員は、男子はダバオ市の小学校、中学校に隔離收容し、女性は別の建物に收容された。

食事は一日に御飯大スプーンで一杯だけ、その御飯も大豆と米が半々で、十二月二十六日まで続けられた。

その間、五日間ぐらい、若年の元気な者約二〇名は、日本軍機の爆弾により大きい穴を明けられた飛行場の滑走路の穴埋め作業に引つ張られたことがあったが、十二月二十六日、日本軍の上陸が始まると、我々が逃亡しないように鉄城網を張り監視されるようになった。

その頃には、銃声が聞こえだし、現地人の兵隊に尋ねると、軍隊の演習だということであったが、三時間ほど経過したころ、前方一〇〇メートルの道を戦車が通過しました。戦車のマークが「日の丸だ」とか「赤十字マークだ」とか話し合っているとき、監視兵から「皆、部屋に入って窓を占める」と命令された。

間もなく飛行機が盛んに飛び始めたので少し窓を明けて戸外を見ると、すでに監視兵は一人もいなくなっ

ており、全員で、声を合わせたように「日本軍が上陸したのだ」とグラッドに一斉に飛びだしました。

この上陸部隊は海軍の入船部隊でした。

三、川添部隊入隊と復員まで

昭和十八年七月、ダバオ市で徴兵検査を受け、現地邦人で同時に入隊したのは一一名、十日ばかりして一等兵に進級した。私は、一〇名を引率、各小隊長、中隊長、大隊長舎に行き、進級の申告をした。

終戦を知ったのは、昭和二十年九月十四日、海拔三〇〇〇メートルのアポ山麓の陣地で歩哨に立っていたときで、その後、武器、弾薬、測量器、トランシット、コンパスなど全部を埋めて下山した。

古川拓殖(株)の広場の捕虜收容所では、捕虜キャンプへの水道工事の使役に選抜され、米軍の中尉と一緒に配管工事を行った。また精米作業なども行った。その中尉は人情味厚く、懇ろな人で、これがきっかけで復員一番船に乗船させて戴いたのではと思っている。

船中ではミス・サルゼント(炊事係)もした。